

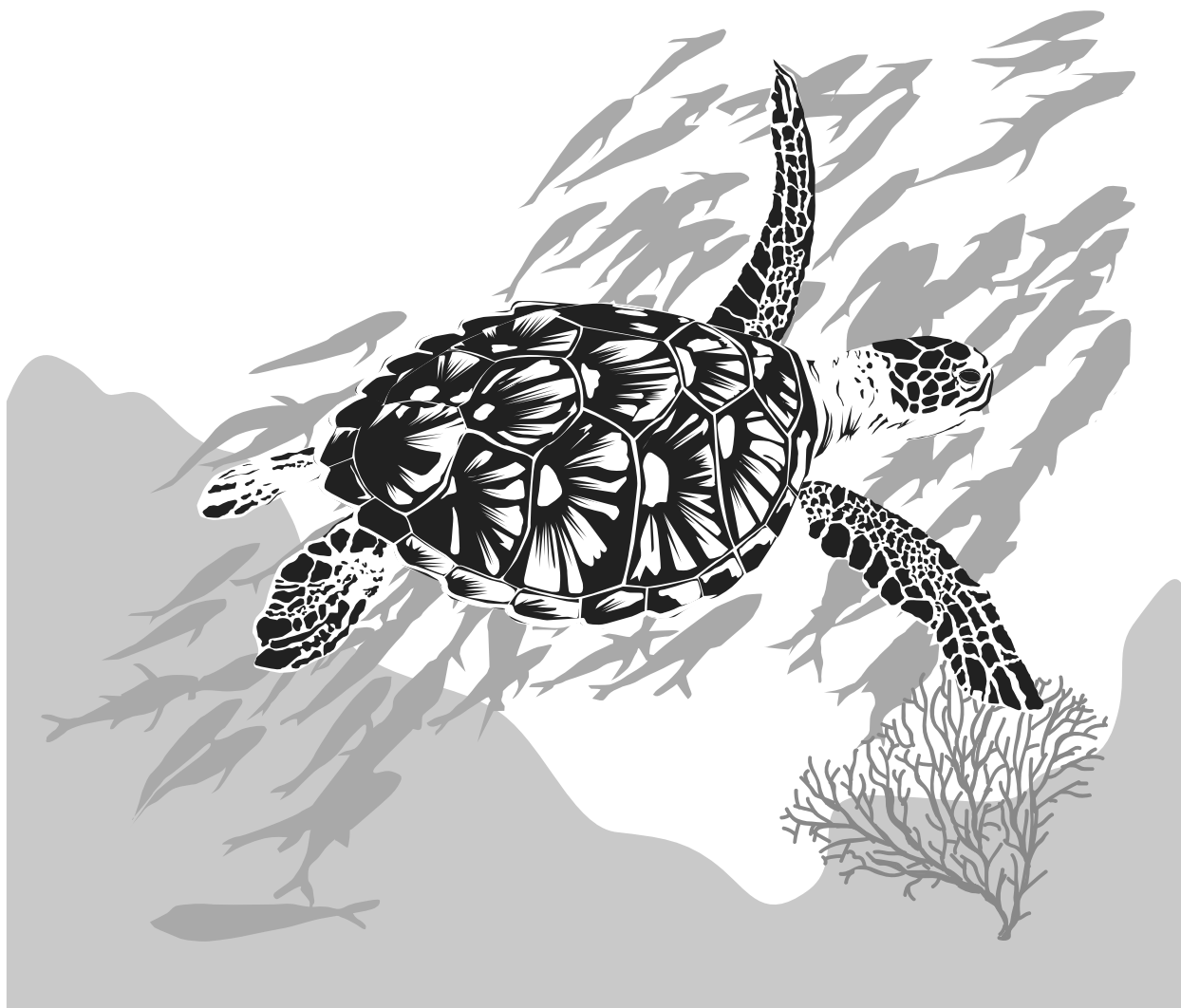


# Marine Turtler

マリンターラー

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第26号





表紙の絵  
中西 悠 (なかにし ゆう)

泳いでいるアオウミガメを描きました。一作目は写実的にカメを書いてリアルすぎて怖いと言われ、二作目は背景が寂しいと言われ、三作目に岩と魚を書いたら岩が濃くて魚が消えてしまい、四作目にコントラストを工夫してようやく完成しました。絵を描いたというより、絵にデザインを学ばせてもらった作品です。

## 表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。(仕上がりはモノクロになります。)
- 期限：メ切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302  
日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部  
※メールの場合は [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org) まで  
件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリントートルー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立场上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリントートルーと呼ぶことを提唱します。

# Contents

ウミガメ基礎講座 26 番号札に感じるロマン 岡本 慶	3P
第29回 日本ウミガメ会議与論大会を終えて 光 俊樹	5P
事務局だより	
枚方まつり2018に出店しました 松宮 賢佑	7P
各地からの報告	
ウミガメプールの大掃除をしました 一野 愛美	8P
室戸から放流したアカウミガメが中国で密漁される 田中 優衣	9P
高知大学にウミガメ同好会「かめイズム」ができました! 高田 光紀	11P
新人紹介	
タートルたちとの出会いから 中西 悠	13P
追悼文	
小林茂夫さんを偲んで 若月 元樹	14P
STSmembers募集中!、ご寄付をいただいた方々、編集後記	15P

## 番号札に感じるロマン

国立研究開発法人水産研究・教育機構 国際水産資源研究所 岡本 慶

「5 番の番号札をお持ちのお客様は 2 番の窓口へお越しください」。先日訪れた市役所の受付で、公共施設でよく耳にする音声案内を受けました。この番号札は、単に順番を整理するために配られるものですが、実はウミガメ調査の世界でも番号札が使われています。では、どのような形で番号札が用いられているのか、その方法や明らかになってきたことを紹介します。

広い大海原を生息域とする彼らが、どのような生活史を送っているかを調べるのは容易ではありません。しかし、どれぐらい移動するのか？ どれぐらいの範囲を生活圏とするのか？ 大移動しそうな生き物ほど、これらの生態が知りたくなります。ウミガメ類の海中での移動について調べるために、最初に用いられた手法は、目印を付けて放流し、次に見つかる場所によって、移動した距離を知る方法でした。一口に目印といっても、放す時の情報を小瓶に入れて甲らの端にくくり付けたり、背中にペンキで番号を書いたり、放す時の情報を甲羅に書いたものもありと様々です。そのような状況の中で、近年で用いられているのは番号の付いた札（＝標識；素材はプラスチックや金属など様々）を装着して放流する手法です。この手法は、標識放流と呼ばれ、世界中のウミガメ調査の中で一般的な



プラスチック製のウミガメ標識

手法となっています。2018 年 6 月に、この標識放流で、大変貴重な例が記録されました。9 年前にメキシコで標識をつけて放流されたアカウミガメが、高知県室戸市で発見されたのです。野生のアカウミガメによって太平洋の横断が確認されたのは、史上 2 例目のことでした。これまで数十年にわたって標識を装着されてきたウミガメは、日本に限っても実に 1 万個体以上に及ぶと思われます。たくさんの方々によって装着されてきた標識が、長い年月を経て発見された時の感動といたら、そのニュースを聞いただけでも興奮してしまうほどです。

この標識方法の欠点は、放流と再発見の地点はわかっても、放流場所から再発見場所までどのようなルートで移動したかわからないことです。また、再発見された時にその場所に留まっていたのか、それとも移動の途中に見つかったのかも知ることはできません。それを解決するために1980年代ごろから世界で始まったのが、人工衛星による追跡です。ウミガメの背中に発信機を取り付けて放流し、呼吸のために浮上した時など、発信機が空気中に出た際、人工衛星によって位置情報を入手するという手法です。この発信機を用いることにより、リアルタイムでウミガメの位置がわかります。衛星追跡の結果で、例えば、大西洋では南米の熱帯域で産卵するオサガメが北大西洋を広く回遊することや、太平洋では日本で産卵するアカウミガメは太平洋沖と東シナ海を餌場とする二つ集団がいることがわかってきました。

昨今、技術の目覚ましい進歩により、衛星追跡などの新しい技術が研究に取り入れられています。長く用いられてきた番号標識は今でも用いられています。先人の方々の知恵と並々ならぬ苦勞に敬意を払いながら、“番号札”のようなアナログな手法と“スマホ”のようなハイテク機器が混在する現代社会のように、ウミガメにおいても番号標識と最新機器との合わせ技により、ウミガメの謎が解明されることを楽しみにしたいと思います。



衛星追跡用の発信機を装着したウミガメ

### 与論町役場環境課 光 俊樹

第29回日本ウミガメ会議与論島大会にご参加いただき誠にありがとうございました。北は北海道、南は黒島から大勢の方が鹿児島県最南端の与論島へ来て下さったことを心より感謝いたします。

会議の初日は、屋久島の大野睦さんによる小学校での出前授業を行っていただきました。小学校の低学年と高学年に分けてウミガメの生態について、各学年に合わせた授業をしていただきました。参加者の皆さまへは、大潮の干潮時にしか現れない幻の砂浜である百合ヶ浜の見学を企画しました。夜の部として茶花海岸の特設ステージにて前夜祭を開催し、フラダンスと民謡バンドの演奏にのせて、地元産の料理や与論献奉を楽しんで頂きました。参加者からは「与論の風土を感じられた」とのお声もあり、企画者としてはとても嬉しい思いでした。



2日目と3日目は、与論町中央公民館において開会式に始まり、ミニシンポジウム「与論島におけるウミガメ。地域観光と漁業との関係」を皮切りに、日本のウミガメ2018、口頭発表およびポスター発表と全国のウミガメ関係者からの発表が行われました。ミニシンポジウムでは、各地におけるウミガメの現状紹介について5地域の発表がありました。その後のパネルディスカッションでは与論島の漁業とマリン事業者、観光関係者にご登壇いただき、それぞれの視点にたったディスカッションを行いました。与論島の方々にとっては各地の現状を知る機会に、島外の方々へは与論の現状を知って頂く機会になったと思います。ウミガメによる漁網の被害は確認されていますが、海藻の減少はウミガメが原因とは一概に言えないとわかり、今後も調査が必要だと改



めて認識しました。口頭発表では、全国各地で調査・研究を行う学生や研究者から 14 題の報告がありました。ウミガメの遊泳範囲の調査結果などたいへん興味深い発表もあり、とても勉強になりました。ポスター発表では、16 題の掲示がありました。研究者や水族館関係者などの様々な立場や視点で報告されていました。参加者の皆様方の交流と情報交換の場となったなら、私たちとしては幸いです。

日本ウミガメ会議与論島大会を開催するにあたり、ご支援とご協力いただいた多くの皆様、ご参加していただいた皆様に心より感謝申し上げます。配慮の足りなかったところもあったとは思いますが、与論島にとっては大きな活性化につながりました。個人的にも、次回のウミガメ会議で皆様にお会いできることを楽しみにしております。



## 枚方まつり 2018 に出店しました

大阪事務局 松宮 賢佑

海の見えない大阪事務局では、デスクワークがほとんどです。でも、パソコンと向き合うだけでは、ウミガメの魅力を一般の人に伝えることはできません。そこで、協議会の取り組みやウミガメを少しでも地域の皆様に知っていただくため、昨年から地元小学校での出前授業や地域イベントへの出店などの活動もしています。その一つが夏祭りでの出店です。事務局がある枚方市では、夏休みに「枚方まつり」を開催しており、60以上のブースや特設ステージが作られ、2日間でのべ5万人以上が来場します。昨年、このイベントに出店してグッズ販売と当会のPRを行っています。たこ焼き、かき氷、金魚すくい、お祭りらしい店が立ち並ぶ中にポツンとあるウミガメのブース。その不思議さもあってか、ありがたいことに2日間でたくさんの方に来ていただきました。

「以前から気になっていました！」とウミガメの話を熱心に聞いてくださる方や、「今年もお店があって良かった！」とグッズを購入してくださる方、当会の会員の方もいらっしゃいました。しかし、ほとんどは「海のないところでなぜウミガメ？」という物珍しさで立ち止まっています。これは、海のない枚方ならではの、集客方法かもしれません。

如何にも興味がありそうな方々に、「もしかしてウミガメに何か所縁がありますか？」と声をかけてみると、それぞれに面白いエピソードをお持ちでした。昔、日和佐に住んでいてウミガメの産卵を見た、ハワイの海でウミガメと泳いだ、当会付属の黒島研究所でウミガメの話を聞いた、むろと廃校水族館でブリくじを引いた、知り合いが某大学のウミガメ研究会にいる、将来水族館で働きたいという高校生、カメ好きの小学生などなど。いつの間にかウミガメブースは私とだけでなく、お客様方も語り合うステージとなっていました。

途中、暑さと疲れもありましたが、いつの間にか一緒に店番をしてくれる小学生が現れたり、会話終わりに焼きそばや焼き鳥が差し入れられたりと、突然現れた助っ人の協力もあり、今年も無事終わることができました。「来年はウミガメのTシャツをよろしく！」「受験勉強だけど来年も来ます！」そんなお声もいただきましたので、気が早いですが来年も出店予定です。来年の夏も、皆様のウミガメエピソードをお待ちしています！





### ウミガメプールの大掃除をしました

紀宝町ウミガメ公園 一野愛美

皆さん、こんにちは！私は7月より岡崎に代わって紀宝町に赴任しています。紀宝町ウミガメ公園では、一年に4回ほどウミガメプールの大掃除をします。先日11月20日に、今年3回目の大掃除を行いました。当日は、ウミガメサポーターさんや学生さん、役場やボランティアの皆様など沢山の方にご協力を頂き、半日かけて行いました。大掃除は、プール内の海水を全て抜き、底や側面の汚れをたわしで落とします。プールの掃除だけでなく、カメの甲ら磨きと身体測定も合わせて行っています。

ウミガメ公園のプールはとても大きいです。底まで下りるのは脚立をつかわないといけません。飼育しているウミガメたちも大きいので、なんと、ウミガメの重さを測るためのクレーンまであります。大掃除やウミガメの計測は、ウミガメ公園のメンバーだけでは作業ができないので、サポーターさんや学生さんにも手伝ってもらっています。ウミガメ公園では全部で11頭のウミガメを飼育しています。今回は、ほぼ全てのウミガメが前回の測定よりも少しずつ大きくなっていました。例えば、2年前に地元でふ化したアカウミガメは、甲らの長さが2cm成長しました。サポーターさんも「大きくなったね〜！」と喜んでくださり、私も嬉しくなりました。ここに住むウミガメは、たくさんの方に見守られているのだと感じました。それに、プール掃除の日は、私たちとサポーターさんや学生の交流の場にもなっています。まだまだ知らない事ばかりの私には、皆さんとの会話がとても勉強になります。

プールの海水も全て入れ換わり、今が一番、綺麗に見えるタイミングです！ウミガメたちに会いに、ぜひぜひお立ち寄りください！次回のプール大掃除は3月中頃の予定です。詳しい日程は、SNSや紀宝町ウミガメ公園HPの飼育員ブログなどに掲載予定です。こちらもぜひご覧下さい。



### 室戸から放流したアカウミガメが中国で密漁される

むろと廃校水族館 田中 優衣

「室戸で放流されたアカウミガメのようだ。番号を確認してください」。再発見のメールが事務局から届きました。発見された場所は中国。そう、私が室戸で放流したウミガメは、はるか遠くの離れたところで見つかったのです。

私たちは高知県室戸岬において大型定置網でとれるウミガメを調査しています。毎年 200 頭ほどに標識をつけて放流し、その回遊を調べています。その結果、室戸で標識をつけたアカウミガメは、鹿児島や宮崎、和歌山県の砂浜に上陸したところを再発見されます。つまり、南日本で産卵するアカウミガメは、室戸付近を回遊して産卵地に向かう個体もいることがわかってきました。

今回、連絡が来たのは中国です。海外で見つかること自体が珍しいのですが、何よりもショックだったのは、多量に違法取引され、すでに死んでいたウミガメに交じていたことです。中国ではアカウミガメは国家 2 級の保護動物に指定され、捕獲が禁止されています。しかし、ウミガメを漢方や料理とする習慣が残っており、未だにこのような密漁があるそうです。今回の違法取引では 128 個体のウミガメが犠牲になりました。そのうち 3 個体に日本の標識がついており、2 個体は屋久島、1 個体は室戸から放流した個体でした。日本のアカウミガメの産卵は、2013 年から激減し、今では 3 分の 1 ほどになっています。以前から、「中国による漁業の影響では？」という仮説はありましたが、具体的な情報がありませんでした。今回の事件は、その説を後押しするものとなりました。アカウミガメは成熟するのに 30 年ほどかかります。もし、今回の事件が、違法取引のごく一部であるなら・・・、次に産卵が回復するのに何年かかるのでしょうか。

この事件でもう一つ残念だったことがあります。密漁の件はむろと廃校水族館の Twitter や地元のテレビ局で放送されましたが、反応が薄かったです。メキシコから放流したアカウミガメが日本で見つかったことの方が、よっぽど注目度は高かったです。違法取引というネガティブなニュースは誰も求めているのでしょうか。また、この件は、中国の Web ニュースでは見れます。でも、日本のマスコミは自由に使える映像を入手できておらず、各社ともにニュースにできないようです。私たちも、何度か中国サイドに問い合わせましたが、ダメでした。国境をもたないウミガメを保護する難しさを知った事件でした。



室戸で放流時のアカウミガメ



中国で見つかったアカウミガメに付いていたタグ

### 高知大学にウミガメ同好会「かめイズム」ができました!

かめイズム 高田 光紀

こんにちは、高知大学ウミガメ同好会「かめイズム」会長の高田光紀と申します。かめイズムは、2018年4月に設立し、活動を始めたばかりの同好会です。今回は挨拶もかねて、かめイズムの設立の経緯や活動について紹介します。

同好会を作ろうと思いついたのは、2年前に行われた日本ウミガメ会議室戸大会がきっかけです。学部2年生だった私は当時からウミガメに興味を持っていて、高知大学でウミガメの研究をしている海洋動物学研究室の先輩とともに、その大会に参加しました。そこで東京海洋大学うみがめ研究会をはじめ、多くのウミガメサークルやウミガメ研究者たちと出会い「高知大学にもウミガメサークルが欲しい!」と強く思いました。

そして去年、私は同じくウミガメに興味を持った同回生の3人とともに、先輩たちや顧問である齊藤知己准教授（海洋動物学研究室指導教員）にも協力して頂きながら、同好会を設立しました。出来たばかりの同好会にも関わらず、多くの入会希望者に恵まれ、現在1回生から4回生まで含めて23名で活動しています。メンバーは生物専攻の学生だけでなく、さまざまな学部と学科で構成されています。

現在の主な活動は、高知県芸西村にある琴ヶ浜においてウミガメの産卵と孵化調査です。琴ヶ浜は長さ4kmもあり、奥行きが長い所で100m以上もある大きな砂浜です。この砂浜は毎年アカウミガメが産卵に来るらしいという情報はあったものの継続的に調べられていませんでした。そこで、今年から我々が県の許可を得て調査を始めました。調査は5月から8月末まで、週一回のペースで砂浜に訪れています。琴ヶ浜は砂が黒く、真夏の昼に砂浜を歩くと、長靴を履いていても足が火傷しそうな熱さになります。そんな砂浜を長い時で3時間以上も歩きたいへんな調査です。苦勞もあって、メンバーたちと今年初のウミガメ卵を見つけたときはとても感動しました。毎週欠かさず続けられたのも、こうした喜びがあったからだと思います。最終的に、今年はウミガメの上陸16回うち産卵8回でした。予想していたよりも多くのウミガメが産卵に来ていました。



琴ヶ浜の風景

しかし、自然相手の調査は思うように行かないこともあり、8月に来た台風により記録的な高波が発生して産卵巣の目印が流され、子ガメのふ化を確認できない産卵巣もありました。最後まで見届けることができなかったのは残念でしたが、この浜にウミガメが来ることが分かった以上、めげずに続けて行きたいと思います。

高知県はウミガメが産卵に訪れるだけでなく、大学にウミガメの研究室もあり、その上に「春野の自然を守る会」や「むろと廃校水族館」などのウミガメ調査団体がある非常に恵まれた土地だと思います。今後、この恵まれた環境を生かして様々な活動を行う同好会にできるようメンバー全員が精一杯頑張っていきますので、これからどうぞよろしくお願い致します。



産卵を確認した時の様子

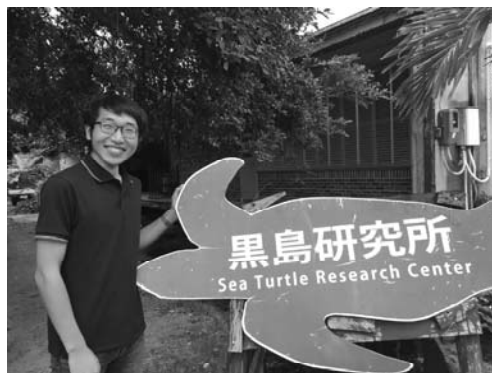
### タートラーたちとの出会いから

黒島研究所 中西悠

ウミガメと付き合い始めたのは大学 1 年生の時です。新入生歓迎会で送迎してもらった琉球大学ウミガメ研究会の宮里俊輔先輩との出会いが始まりでした。私は中学から続けていた吹奏楽に入学していたのですが、大学に入ったのをきっかけに新しいことを始めたいと思っていました。ダイビングでもしようかと思っていたところ、先輩はウミガメ研究サークルの話をしてきました。研究と聞いて、なんやかんや怪しい実験でもしているイメージだったので、眼中にありませんでした。しかし、先輩は「この機器何に使うか知っている？」と助手席にある機器を指して言いました。「水族館から借りている計測器なんだ」と始まった話は、予想していたような勧誘話ではなく、ただの自慢話でした。そこから、野外調査での面白い出来事続き、ついには、カメとまったく関係のないバカ話になっていました。今では、その機器がなんだったのかさえ思い出せません。でも、先輩の心底楽しそうな姿をみてウミガメ研究会に入ることを決めました。

研究会では、朝 5 時に起きて沖縄読谷村にある定置網の漁船に乗せてもらって 1m 以上もあるウミガメに嫌というほどタグ付けをしたり、一限目から授業があるのに亀仙人と呼ばれる小林茂夫さん（故人）と毎晩母ガメが来るのを待っていたり。少しずつ自分にも自慢話が積み重なっていきました。今の上司である黒島研究所の若月さんと亀田さんに出会ったのは、研修で黒島を訪れた時です。研究所に着いて早々コンクリートの道づくりが始まりました。その次は、10m 以上もある大木をのこぎり一つで切り倒したり、研究所のはずなのに土木作業がたくさん。それでも、達成感に浸って焚火を見ながら飲むビールは忘れられませんでした。もちろん、ウミガメ調査もしたのですが、自分の研究所での自慢話は土木作業とビールになりました。

卒業研究では植物の研究室に入り、一方で、楽器を吹くのに力を入れました。卒業後は音大を目指そうと思っていたのですが、すぐには難しい現実を知りました。そんな時、若月さんと亀田さんに飲み連れて行ってもらい「音楽が駄目だったらうちに来ていいぞ」から始まり、居酒屋を出る頃には「よし、来い」となっていました。研究所では本当に他では出来ないような仕事がたくさんあります。それに、長期休暇にはたくさんの大学生が訪れます。宮里先輩が聞かせてくれた自慢話のように、現役生たちに心底楽しい話をできたら、と思いながら、これからも経験を積んでいきたいと思います。



## 小林茂夫さんを偲んで

むろと廃校水族館 若月 元樹

小林茂夫さんは今から 20 年ほど前に東京から沖縄へ早期退職で引っ越してきました。糖尿病の療養が目的の移住だったため、近くに「病院」と「海辺」があることにこだわり、ジョン万次郎が上陸したことで知られる糸満市の大度海岸近くに終の住処を求めたのでした。

療養のはずが、海岸に捨てられた犬や猫を引き取って世話をする日々。保護した犬の散歩中にウミガメの漂着死体と出会ったことが、マリンタートラーとなるきっかけでした。糸満といえば沖縄戦の激戦地。ひめゆりの塔に近い大度海岸周辺の集落は、一家全滅で跡継ぎのいない宅地が点々としています。小林さんよりも前にこの付近の砂浜を歩いていた私は、沖縄戦についても勉強をし、その歴史を踏まえた姿勢で調査に臨んでいました。それは、旧満州生まれの小林さんにとって尚更のことだったでしょう。日々が戦没者の安寧を願いながらの調査でした。



言うまでもなく、ウミガメ調査はハードです。小林さんは産卵シーズンには元気になり、シーズンが終わると力尽きて入院することの繰り返しでした。小林さんは目が悪くても、ライトを付けずに真っ暗な浜を歩きました。ウミガメがゴソゴソしていると思って近付いたら、カップルに驚かれ「砂浜はヒトにとっても繁殖の場なんだね」と笑いあったことなど、思い出は尽きません。しかし、今年の8月以降、小林さんとの思い出が増えることは無くなりました。

与論会議の後、平手副会長と共に墓参りに行きました。小林さんのフィールドである大度海岸が見える場所でした。私も、小林さんのように若者から「よく頑張っているなあ」と感心されるおっさんにならねばなりません。





## STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きの方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし  
 年会費:個人会員3,000円、団体会員10,000円  
 特別会員100,000円  
 会員特典:オリジナル会員証&グッズ、機関誌



## ご寄付を頂いた方々

BBS ジャパン、玉岡昇治、シャディ(株)、イケムラシゲル、ヤフー(株)、南知多ビーチランド、吉崎和美、小林茂夫、山田美千恵、福原富士美、白崎野百合、コカコーラボトラーズ(道の駅日和佐かめたろう)、山田輝一、前田直美、上村洋子、串本海中公園センター

そして、枚方祭りのブース、黒島研究所、みなべ基地、むろと廃校水族館に募金&差し入れをくださった皆様  
 (ご寄付をいただいた順)



## 編集後記

今年からサメを調べています。黒島のまわりにはレモンサメという可愛い名前が普通に泳いでいます。夏場であれば、ちょっと見てくる、といって簡単に探せるぐらいです。不思議なことに、このサメは3mに達する大型種なのに、黒島には1mまでの子サメしかいません。そこで、子サメを捕まえて標識をつけて放流しています。結果として、どうやら3年で1mに成長すると何処かへ移動するようです。来年は1mサイズに衛星発信機を付けて、移動先を明らかにしようとしています。標識放流と衛星追跡・・・気づけば、ウミガメ調査とまったく同じことをしていました。産卵にきた母ガメたちは何処へ行くのか、それを調べるための方法です。サメとウミガメ、大型の海洋動物は同じ謎を持っていて、共通の手法で調べられるのかもしれませんが。

黒島研究所:亀田 和成



マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2018年12月31日  
 発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302  
 電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535  
 URL <http://www.umigame.org> E-mail [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org)